



いなき

南三陸町 人々の一年

娘を引き揚げるためいち早く海に出た漁師
最愛の妻を亡くし幼子と再起を誓う夫
役場職員だった夫を探し続ける妻
日に日に絶望の念を深めていく女性
仮設住宅の抽選をめくり言い争う人たち…

800時間の取材テープが物語る、
「命」を紡ぐ人々の素顔。

◎プロデューサー：井本里士 ◎監督：森岡紀人 www.mbs.jp/ikinuku-movie/

◎撮影：原 淳二、古東千由、大西史浩 ◎取材：森岡紀人、上野由洋、山口綾野 ◎編集：大川義弘

◎音楽：D flat ◎題字：平 大介 ◎録音：相良 希 ◎効果：松田勇一 ◎宣伝：福井亜砂子 ◎宣伝美術：東 學

◎配給宣伝協力：松井寛子、中山和郎 ◎協力：TBC、TBS ◎制作・著作・配給：MBS 2012年/日本/HDカム/カラー/99分

MBS

僕がテレビのガンジがらめの制約に絶望して「観察映画」をインディペンデントで作り始めたときのように、毎日放送局内にも「本当はもつと自由に、このようなドキュメンタリーが作りたいのだ」という欲望が、マグマのように熱を帯び噴出先を求めているのではないだろうか。表現の欲求を爆発せんとするドキュメンタリストたちが、テレビ界のあちらこちらでゲリラ戦を始めているようにも見える。もしそうだとするならば、これはテレビ界にとっても、ドキュメンタリー界にとっても、真正正銘の「事件」であろう。しかもワクワクするようない!

想田和弘

(映画作家『演劇1』『演劇2』)

生き抜く

南三陸町 人々の一年
マスコミに身を置く
取材チームが突きつけた、
静かなるアンチテーゼ。

ドキュメンタリーに定評のあるテレビ局は幾つかある。しかし、孤独なゲリラ戦よろしく、その制作者がバーンと撃たれたら一巻の終わりという、本当は、どの局もお寒い実態だ。そんな中、毎日放送は唯一組織的に取り組んできた「ドキュメンタリーの雄」である。テレビマンの表現をローカル放送から全国のスクリーンに解放放つ。私たちが希求するこの流れを、「ドキュメンタリーの雄」が、そして本作が、太くしてくれと確信している。

阿武野勝彦

(東海テレビプロデューサー『死刑弁護人』『青鬼とろろぼう』『平成シレンマ』)

海南友子

(ドキュメンタリー映画監督『いわさきちひろ』『27歳の旅立ち』)

苦しい人々の前で、何を取材すべきか、自分たちにはできることなど何も無いのではないか? その悩み、苦しみの中から戸惑いながらカメラをまわし、被災者と共に泣き、共に小さな復興への希望をつなぐ。その中からこの作品がうまれた。

生き抜く人間の姿は美しい。娘さんを亡くした父親の深いしわが刻まれた顔が美しい。身内をすべて失って悲嘆にくれた顔が美しい。船を失ってしまった漁師たちが16人共同で定置網漁を再開した時の表情が美しい。それらの美しさから、観客である僕らは貴重なものを受け取る。そのようにして、人々の営為が継がれていくことがほんとうの歴史だろう。見終わって「ありがとうございました」と感謝の言葉を言いたくなった。南三陸町の人々と、この映画を作った人々に。

金平茂紀

(TBS『報道特集』キヤスター)

映画『生き抜く』を観ながら、登場するお一人お一人の3月11日を追体験し、今も抱き続ける思いに触れた時私はそこに巷で気安く使われている「絆」ではない、絆そのものをまざまざと見た気がした。

瀬瀬あや

(記録映像作家『祝の島』)

